高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会共催事業

特別展「花と歴史の爛漫土佐」
第2部「月と龍馬の桂浜―坂本龍馬銅像物語」
特別講座「『坂本龍馬 湿板写真』と幕末の写真技術」

三井 圭司氏（（公財）東京都歴史文化財団学芸員・アーツカウンシル東京企画係調整担当係長）

三浦 夏樹（当館学芸担当チーフ）

令和5年9月16日（土）19:00～20:30　於 高知県立美術館ホール

仏のダゲールが発明し、一八三九年に公開された「ダゲレオタイプ」が、最初の写真方式と言われている。銀鏡に画像を生成する技術で驚くほど高解像度でありながら、絵画同様、一回の制作で得られる画像は一枚のみである。

「写真」として後に一般化する光学像を定着する技術開発の試みはダゲールが起点ではなく、十八世紀末、英のウェッジウッドが幼児教育のために始めた研究が嚆矢だと考えられる。また、英のタルボットは撮影で紙製のネガ原板を作り、この原板で印画紙にプリントする「フォトジェニック・ドローイング」を編み出す。そして、これを発展させた「カロタイプ」を一八四一年に発表。この技術によって、世界初の写真集『The Pencil of Nature（自然の鉛筆）』を上梓した。

そして、英のアーチャーが一八五〇年にガラスを用いる「コロディオン湿板方式」を発表した。カロタイプのように印画紙にプリントすること、ダゲレオタイプのように撮影原板を鑑賞すること、この両方の使い方が可能な技術として活用され、一八八〇年代にゼラチン乾板へバトンを渡すまで、中心的写真技術として世界的に普及した。そして、これは日本も同様であり、坂本龍馬の写真もこの技術によって制作されている。

上野彦馬の父・俊之丞は一八四八年に初めて日本へ写真機材一式を輸入したが、この俊之丞は彦馬が十三歳の時に亡くなっている。この上野彦馬が開業する「上野彦馬撮影局」こそ、坂本龍馬が撮影されたスタジオである。

彦馬は舎密試験所へ入り、ここで写真と出会うのだが、この準備として名村八五右衛門にオランダ語を学んだ。この名村も日本の初期写真文化に関わりのある人物で、ペリー来航時にダゲレオタイプで撮られている。この写真はダゲレオタイプの特性として鏡像になった。そのため、名村は他の通詞にこれを伝え、以後撮影される人は着替えをし、刀を逆に差して矛盾が生じないようにした。江戸人にとって、鏡像即ち着物の合わせが逆になった姿を作ることは、看過できなかったからであろう。

舎密試験所に入った彦馬は、蘭の医師ポンペから写真を知り、津藩士の堀江鍬次郎とともに研究を進める。出島に滞在していたブルークで、後には写真家ロシエから技術を学んだ。ロシエとの出会いで機材の重要性を知った彦馬たちは、津藩主・藤堂高猷から約一五〇両を引き出し、出島商人ボードワンから機材を購入し、技術を確立させた。

その後、彦馬は津藩の有造館洋学所に講師として招かれ、日本初の科学の教科書『舎密局必携』三巻を出版する。巻三には「撮形術　ポトガラヒー」としてコロディオン湿板方式の詳細が記されている。彦馬は帰郷後、文久二年暮に自身のスタジオを長崎に開業し、ここで龍馬の写真が撮影された。なお、日本最初の写真家は、上野彦馬と下岡蓮杖のどちらかとよく聞かれるが、実はどちらでもなく、鵜飼玉川という人物である。

コロディオン湿板方式は、後の乾板やフィルムと違い、感度が低い。また、原板を作って撮影し、暗室で現像液に浸けるまでの間に乾いてしまうと像が現れない。そのため、撮影の際には、必ず傍らに暗室が必要となる。

龍馬が撮られた状況を考えるうえで、この特性は重要。感度が低いため、被写体となる人物も数秒間静止しなければならない。被写体にも相応の負担がかかるのである。また、誰が支出するかを別にしても、安価なものではない。何か特別な人生の節目で写したとも考えられうる。

龍馬の湿板写真は慶応二～三年頃に撮られたと言われ、材料が少ないこともあり深く追究することがなかった。しかし今回改めて「龍馬の脱藩が赦された時期が撮影時期に関係するのでは」という指摘があり、立位と同じ日に撮られたとされる座像や溝渕広之丞の写真、台紙に書かれた溝渕の従者・吉村正の覚書、時系列などを整理したが、やはり正確な時期の特定には至らなかった。しかし、後藤象二郎に会い、脱藩の罪を許された時（慶応三年一月）であれば辻褄は合う。あくまで可能性として提示するしかないが、今回の話で、少なくとも検証の新たな糸口が見つかったと言えるだろう。

企画展「龍馬の真髄 ― 龍馬は何者？ Who is Ryoma？ ―」

記念講演会

「手紙に込められた龍馬の真意を探る―深読みする楽しさ―」

宮川　禎一氏（京都国立博物館特任研究員）

令和5年11月4日（土）13時30分～15時　於 坂本龍馬記念館新館1階ホール

坂本龍馬の歴史学的な研究評価は今も盛んであり、「凄い」とか「大した事ない」とか「捏造だ」とか評価はさまざまです。でも私も含めて現代人は誰も龍馬には会ったことは無いのです。

現代、坂本龍馬に会う方法はひとつだけです。残された一四〇通ほどの龍馬の手紙を丹念に読むことです。それは簡単そうに聞こえてなかなか難しいことです。ですから現代語に訳することに意味があります。現代人が書く多様な評判はさておいて、現存する手紙から彼の人間性を直接読むほうがよっぽど坂本龍馬という人に近づけます。坂本龍馬記念館で龍馬の話をするのはなかなか難しいのですが、私がこれは龍馬らしいと思う手紙をいくつか紹介します。あまり政治的な手紙は選んでいません。家族や知人にあてた手紙の中にこそ坂本龍馬という人は「今でも生きている」と思います。

手紙の中のキーワード

龍馬の手紙には大切なキーワードがいくつか見られます。

「四十歳」・・坂本家の後継者候補としての龍馬。兄から「四十歳になったら土佐へ帰ってこい」と言われていたからこその表現。龍馬の手紙に三回でてきます。

「この手紙は決して人には見せてはいけない」・・・重要な内容の手紙だという意味です。

「ハイハイ、エヘン」・・「ハイハイ」と二度言う人間は弟的です。話を半分だけ聞いています。

「はからずも」・・龍馬の手紙で多く見られる表現です。人生には予想外のことが起こるという考え。

「露の命ははかられず」・・人間（私）はいつまで生きるかなど分からない。人間の命ははかない。

「義理というもの」・・現代的な「義理」ではなく、正しい大義のような意味。対語に「情け」があります。

「人間というものは」・・とても哲学的。物事を抽象化する心性を持っています。内省的でもあります。

「なんの浮世は三文五厘」・・「この世はそんな安い値段だ。乙女姉さんも思い切って家出したらどうか」

「元亀天正の頃」・・この文久三（一八六三）年は戦国時代であり、実戦が練習だ。講談口調です。

以下では大切な手紙を三通紹介します。

1、文久三年三月二十日　乙女あて　京都国立博物館蔵

文久二（一八六二）年の三月末、龍馬は土佐を脱藩し、天下に活動の場をもとめました。この手紙はその一年後、文久三年の三月に土佐の姉乙女に初めて出した手紙です。実際、その間の手紙は現在残されていません。江戸で幕臣勝海舟の弟子となり、海軍の創設と修行という人生の目標をみつけた喜びが綴られています。その奔放な表現は龍馬ならではです。「四十歳までは家には帰らんつもり」と書いていますが、これは坂本家の後継者問題に関わる表現です。京都で再会した兄権平との話し合いでおそらく「お前が四十歳になったら土佐へ帰って坂本家を継げ。それが海軍修行を許可する条件だ」と兄から釘をさされたのでしょう。しかしながら、やがて次の川原塚茂太郎あての手紙に龍馬の本心が記されることになります。ようやく勝先生の弟子となったばかりで、まだ何の活躍もしていませんが「国のため天下のため力を尽くしております」と大言壮語しています。

2、文久三年八月十九日　川原塚茂太郎あて　東京・個人蔵

龍馬が実家坂本家の後継ぎの問題について記した手紙。龍馬は文久二年に土佐を脱藩し、実家との縁が切れたかのと思いきや、この手紙にはその後も続く家庭の問題があったことが記されています。川原塚茂太郎は兄権平の妻千野の弟で土佐勤王党員。龍馬の姪春猪の母方の叔父にあたります。龍馬に「広い世界を見よ」とアドバイスするような、よき相談相手であったことも文面から伝わってきます。この手紙を読むと、兄権平は弟の龍馬を坂本家の後継者候補と考えていたようです。文久三年二月頃、京都で再会した龍馬に兄の権平は「お前が四十歳になるまでは海軍の修行をしても良いが、そのあとは土佐へ帰って坂本家を継げ」と申し渡したらしいのです。兄の面前では一度は「ウン」とか肯定的な返事をしたらしい龍馬ですが、現状を見て、十年後まで自分の命があるだろうかと考え、自分ではなく、然るべき人物を坂本家の養子（春猪に婿養子）に迎えることを考えて欲しい、と春猪の後見人である茂太郎さんへ頼んだ手紙です。龍馬の本心が記されて貴重です。私の龍馬研究のきっかけにもなりました。

3、慶応二年十二月四日　坂本権平・家族一同あて　高知県立坂本龍馬記念館蔵

私が「大笑いの手紙」と呼ぶもの。近年、札幌で原本が見つかり、高知県に寄贈されました。慶応二年一月二十四日未明に伏見寺田屋で襲われて怪我をし、伏見の薩摩屋敷に収容され、二月一日には京都二本松の薩摩屋敷に護送された坂本龍馬です。そこで小松帯刀と西郷吉之助と寺田屋での遭難事件からの一連の経緯を総括して「かえりて幕府のあわてものにではいてはからぬ幸いなり」と三人で大笑いしています。その真意とは何か。そこに重大な歴史の機微があったと思います。龍馬が寺田屋で襲われて「幸い」なのはなぜなのか。この手紙に書かれた小松・西郷・坂本の「大笑い」とは何だったのか。

私の解釈は「薩摩藩が龍馬の身柄引き渡しを拒絶して伏見奉行所（幕府）と大モメしたこの事件のお蔭で薩摩藩が幕府の敵であることが明白となり、長州藩を助ける方針が固まった」ということだったと。すなわち龍馬が寺田屋で襲われた事件のせいで同盟交渉が「口約束」のようなあやふやなものではなくなり、幕府も諸藩も「長州と薩摩の深い関係」を明確に知ってしまい「薩長同盟があともどりできないものとなって良かった」と小松・西郷が「覚悟を決めた大笑い」であったと解釈します。これが「日本史の重大な転換点」であることをその時その三人はちゃんと分かっていたという意味です。

このように坂本龍馬の残した手紙を通じて知るのが龍馬の本当の姿であると考えます。

令和五年度 連続講演会 第三回

「幕府高官「京都所司代」再考」

上村　香乃（当館学芸員）

令和5年10月28日（土）13時30分～15時
於 坂本龍馬記念館新館1階ホール

京都所司代とはどのような役職か。京都守護職との違いは何か。幕末期において所司代は、新規に台頭した勢力に圧されて目立たず、ゆえに捨象されがちである。しかしながら、所司代は幕府官僚制を構成するパズルのピースとして当然必要とされており、たとえば、天皇をお守りする「京都の守護」という役割の最高指揮官を担っていた。そこで本講演では、この「京都の守護」を媒介として所司代の役割を説明しつつ、文久二（一八六二）年に設置された京都守護職との連関について検討した。

近世における所司代は、関ケ原の戦いが起こった慶長五（一六〇〇）年に成立した役職であり、以後明治維新まで常置される。定員は一名であり、必ず譜代大名が就任した。幕府官僚機構上の所司代の立ち位置は、朝廷と江戸の役人の中間にあり、いわゆる朝幕の調整役として機能していた。所司代は当初から上方の支配に勤めていたが、その内情は少しややこしい。端的に述べるとすれば、初期は所司代を含む複数の役職が協力して上方の政治を担っていたが、一時権力が所司代に一局集中し、その後再び分権化されて最終的に所司代は上方の一部（大和・山城・近江・丹波国）を統括していく流れとなる。とはいえ、所司代は依然広域を支配していたのである。

さて、幕末期において、「京都の守護」は京都警衛として具体化される。京都警衛とは、外国の脅威から京都、とりわけ御所をお守りする軍事政策のことである。これは、嘉永六（一八五三）年六月のペリー来航をきっかけに朝廷と所司代の双方からの要請で開始された。体制化にあたり、所司代は初め、江戸での評議を求めたが、老中はこれを受けて所司代に諮問をすることで上方のあり方を尊重したため、所司代は京都の支配に係る役人による衆議を図った。この際、各役人から出された上申書は江戸へ届けられ、これを基に江戸での評議が行われていくのだが、取り急ぎの対応策として譜代大名の彦根藩による京都警衛が嘉永七（一八五四）年四月に決定する。なお、彦根藩が京都警衛のために差置く兵の人数や場所については所司代伺いとされ、ここに所司代の権限の詳細が垣間見えた。

この後、同年九月には大坂の天保山沖にロシア船のディアナ号が来航するが、この時点ではまだ江戸での評議に決着がついていなかった。しかしながら、即時の対応に迫られたため、結果として所司代は役人らの上申書を基に独自の判断で指図を行い、老中へは事後報告となった。

さて、ロシア船の来航を踏まえて十月には再度江戸で評議が行われた結果、江戸と上方の意見を踏まえて十一月には彦根藩をはじめとした京都周辺の譜代藩が任命され、警衛体制が拡大される。この中には、近世において御所の軍事的防衛を担っていた京都火消役もおり、警衛担当者の内訳は彦根藩、小浜藩、大和郡山藩、京都火消役であった。所司代はこれを指揮する立場にあり、彦根藩の時と同様に警衛の詳細については所司代伺いとされた。

京都警衛は、安政五（一八五八）年に日米修好通商条約の調印に伴って再拡大されるが、ここでは譜代藩の他に家紋・連枝と呼ばれる徳川家の親戚の大名も採用された。京都警衛を務めた藩の立場は同等ではなく、譜代の彦根藩を筆頭として序列が存在した。彦根藩の下には同じく譜代の小浜・郡山藩が、その下に家門・連枝の高松・松江・桑名藩が、さらに下には京都火消役が控え、これは警衛場所の重要度によって分けられた。たとえば、彦根藩は御所の外門を警衛したのに対し、家門・連枝の三藩は洛中洛外の境界とされた御土居の周辺を警衛している。当初から京都警衛を務めていた彦根藩は、警衛の拡大に際しても依然として最重要の立場に位置したのである。これを踏まえ、彦根藩と所司代の関係性に注目したい。

まず、所司代と各藩の一般的な関係性について説明する。既述のとおり、京都警衛の指揮権は所司代に委任されていたため、有事の際に各藩がまず伺いを立てる先は所司代である。その後、所司代は諮問機関である京都町奉行に意見を尋ね、最終的に所司代が統括した上で各藩へ結果が伝えられる決まりであった。次に、彦根藩の場合であるが、当然同藩も先述の規定ルートを踏む必要があった。しかしながら、同藩が近世初期より担っていた京都守護の家格が藩内での混乱を招き、結果として所司代を飛び越えて老中を介入させ問題の解決を図ろうとする。具体的には、兵の人数の決定を老中に要求したり、支配域の問題について老中首座に直接嘆願したりしており、このような行動に所司代は手を焼いていたと考えられる。

この関係性は、彦根藩主の井伊直弼が大老に就任したことにより、京都警衛においては所司代の指揮下におかれながらも幕府の役職上は所司代の上に位置するという矛盾関係が生じたことで悪化する。その中で、大老就任後に起こった問題の一つが、御所九門の警衛配備に関するものであった。より重要な門を守りたいことから警衛する門を変更してほしいと彦根藩が要求し、これは私情が絡んでいたことから当然受け入れがたいことであると思われたが、結果として所司代はこれを承知したのである。このように、大老に就任した彦根藩は京都警衛についても自らの意見を通すようになっており、所司代の指揮権限はかなり脅かされていたのであった。

しかしながら、桜田門外の変で大老の井伊直弼が暗殺されたことにより、幕府の権威が失墜するとともに京都警衛の筆頭も消失してしまう。これにより京都警衛において彦根藩の代わりが必要となったが、当時所司代でもあり京都警衛も担っていた小浜藩がこの代わりを務めることは不可能であった。理由としては、小浜藩は彦根藩程の石高を持ち合わせていなかったため財政負担能力が低く、かつ、既述のとおり所司代の指揮権はすでに弱体化していたことが挙げられる。こうした中で薩摩藩をはじめとする外様大名が強烈な割り込みをみせたのだが、幕府側は何とか権威を保とうとし、結果として出た案が会津藩の松平容保を所司代に据えかえるものであった。会津藩は彦根藩に匹敵する大藩であり、家門大名ではあったもののすでに安政五年の時点で京都警衛に家門が採用されているため、大した問題にはならなかったのである。ただし、会津藩が所司代は自分の役にふさわしくないとしたため、ここに京都守護職が誕生したのである。

このように、京都守護職の設置は幕府の組織的な問題からも検討することができ、そのキーワードは所司代が指揮権を委任されていた「京都の守護」であったのである。

こぼれ話 ― 犬歩棒当記（五十二）―

手荒い歓迎会

宮川 禎一

司馬遼太郎の小説『竜馬がゆく』一巻目。修業のために江戸に到着した坂本竜馬は土佐藩下屋敷で起居することになるが、新人歓迎会で先に江戸に来ていた土佐藩士らによって布団蒸しにされかけた。しかしそれを竜馬はするりと抜け出して、布団に巻かれたのは大先輩の武市半平太の方であった、というギャグ漫画のような場面がある。

もちろん史実ではなくて司馬の創作なのだが、古いアメリカ映画を観ていたらよく似たシーンが目にとまった。一九三八年の『ロビンフッドの冒険』という古典的名画だ（昨年ここに『恋と剣戟』というコラムを書きました）。映画前半の宴会場での乱闘シーンで主人公のロビンフッドは大勢の敵方に取り囲まれて危うく捕らえられそうになったのかと思えば、混乱の中で敵の親玉の方が自分の手下どもに絞められていたのだ。ロビンフッドはとっとと囲みを抜け出していたという面白い場面だ。

司馬先生がこの映画を観ていた可能性を考えていたが、『司馬遼太郎の日本史探訪』（角川文庫、平成十一年）という本にその気配が書いてあった。司馬遼太郎が楠木正成とロビンフッドの類似性を語る部分だ。

「イギリスのおとぎ話に、ロビンフッドというのがありますね。ロビンフッドというのは森の英雄で木樵の大将です。時の王様を助けて、王権の復興に尽くす山賊の親方みたいなものですね。楠木正成っていうのは、そのロビンフッドに相当するんじゃないでしょうか」

面白い比較だ。司馬先生はロビンフッドのことを書物から知ったのではなく、やはり「あの映画」を観ていたのだと思われる。それを小説に転用したようだ。また千葉佐那子のツンデレ設定もその映画のお姫様（マリアン妃）の影響かも知れない。

『竜馬がゆく』の前半部はこのような「時代小説」であり、研究者の出番は少ない。しかしやがて史実をベースとした「歴史小説」になってゆくのである。

坂本龍馬も参拝した神戸湊川の楠木正成墓碑
（1692 年に水戸黄門が建立）

『高知県立坂本龍馬記念館・

現代龍馬学会 論集 2022・2023 合併号』

を発行します

2022年度・2023年度開催大会の講演要旨・研究発表論文、および坂本龍馬記念館共催の企画展記念講演会の要旨（「飛騰」学会中刷より転載）、特別寄稿を収録しています

【目 次】

（2022 講演・研究発表要旨）

「龍馬脱藩への道」
龍谷大学特任講師・現代龍馬学会理事　髙山 嘉明

「坂本龍馬・中岡慎太郎両氏の四十年忌祭から分かったこと ― 龍馬の北辰一刀流兵法皆伝等は追贈されたものか？」
現代龍馬学会理事　今井 章博

「龍馬の時代の高知城下町～城下の風流「花台」を中心に～」
高知県立高知城歴史博物館副館長兼教育普及課長　横山 和弘

「龍馬と天皇と長州」
萩博物館特別学芸員　一坂 太郎

「海舟・龍馬の海防論の礎 ―伊勢国松阪の竹川竹斎と松浦武四郎」
松阪市松浦武四郎記念館館長　山本 命

（特別寄稿）

「薩長同盟における坂本龍馬の役割」
高知県立坂本龍馬記念館チーフ（学芸担当）三浦 夏樹

（2023 講演要旨）

「浦戸湾の歴史をたどる ―浦戸湾風景絵巻を中心に―」
高知県立高知城歴史博物館学芸課長　藤田 雅子

（2023 研究発表論文）

「海南政典の、ほぼ50年ウェーバーに先行した「官僚制」 ―その源流と吉田東洋の「思索」出発点―」
鹿児島県立短期大学名誉教授　吉田本家末裔　網屋 喜行

「いろは丸の急用」
現代龍馬学会副会長　徳島大学名誉教授　渋谷 雅之

A4版　65頁　令和6年5月末発行予定
販売予定金額500円

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
〒 781-0262 高知市浦戸城山 830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp